

## 『新・古代史』に垣間見る文献研究の遅れ

10311 守山 敬之

今年1月に出版されたNHKスペシャル取材班著『新・古代史 グローバルヒストリーで迫る邪馬台国、ヤマト王権』（NHK出版新書2025）を紹介しながら1点だけ批判しつつ文献研究分野の如何ともしがたい遅れを嘆きたい。

本書は2024年放送のNHKスペシャル「古代史ミステリー」でも特集された最新研究を、番組では放送できなかった詳細な内容も含めて取材に当たったディレクターらがまとめたものである。古代史ファンの皆様には是非ご一読をお勧めする。魏志倭人伝の解釈をめぐる邪馬台国論争や「謎の四世紀」と呼ばれるヤマト王権黎明期における国家の成立経緯については定説がなく多くの説があることを認めた上で、主としてこれまでの考古学の最新研究成果に軸足を置き、遺伝子分析や同位体比分析、出土品の3D復元、製鉄技術、土木技術などの最新科学による新発見を平易な文章で解説しつつ、東アジアを中心としたグローバルな視点から歴史を俯瞰する手法で、古代史論の新たな地平を示そうとしている。

しかしながら、邪馬台国論に明け暮れてきた古代史ファンの目で見ると、文献としての倭人伝の解釈論としては旧態依然とした畿内説 VS 九州説（それ以外も少々加えたプラスチックアルファくらい）の構図から脱してはおらず、「倭の五王」論もよく知られた説を紹介するに留まり、せっかく考古学や最新科学の研究成果によって浮かび上がらせようとしている日本の夜明けのストーリーとはほとんど結びつかないままになっていて、文献軽視と言ってもよいくらいの扱いである。最新研究から逆算的に文献論に戻って解釈をしなおす必要性を感じざるを得ない。

旧態依然とした文献軽視は本書序文「はじめに」の1ページ目から現れる。「そして第三の謎が、卑弥呼の最期。『魏志倭人伝』には、卑弥呼が長年、最大のライバル・狗奴国という勢力と争ったことが記されている。しかし、結末は書かれていない。そのため、卑弥呼はその最中に亡くなったとも言われている。」(p.3)とある。「言われている」のは事実だから、そこは間違っていない。問題はその前の解釈を一解釈としてではなく定説であるかのように書いていることである。そこは批判したい。

まず、倭人伝には卑弥呼が狗奴国勢力と争ったことが実ははっきりと書かれていない。この話は倭人伝の叙述中の正始八年の条（「其八年太守王頎到官倭女王卑弥呼與狗奴國男王卑彌弓呼素不和…」）を解釈したものだが、卑弥呼と狗奴國男王とが「不和」であるという表現がなされているだけである。『説文解字』（許慎・西暦100年頃）などによればこの時代の「和」の字義は「相應（応）也」または「應也」であり、「不和」は「応じない・応えない」つまり何かに対抗する義である。字書がこうだと決めつける字義はさておいても、少なくとも「不和」に戦争状態であるという意味は古代においても

現代においてもない。別の箇所では狗奴国の説明として「不屬女王」とあることから、なんとなく仲が悪いと見なされがちだが、「属さない」ということが「敵国である」と同義でないのは少し冷静に読めばわかることである。

また、その後の文によれば帯方郡に派遣された倭國の使者（倭載斯烏越等）が「相攻撃」の「状」を郡に伝えたことも記録にはあるが、誰が誰と「相攻撃」の状態であったのかは解釈の余地がある。特段の敵対関係になかったのであれば、卑彌呼と狗奴國とがともに何かに対して「相攻撃」せんとする「状」であったなど、まったく別の意味で解釈しなおさなければならなくなる。

「長年」というのもどこにも記されておらず気になる決めつけである。「素」の字を「もとより」と読む従来の解釈から、なんとなくずっと前からそうだったかのようにイメージしたのかもしれないが、「長年」というにはあまりに裏付けに欠ける。

仮に卑彌呼の勢力と、女王に属しないと記された狗奴國の勢力とが攻撃しあっているとして、実は倭人伝の解釈の中で大きな疑問を孕んでしまう。

倭人伝は帯方郡から女王國の距離を「萬二千餘里」（12000里余り）と記し、その中には3度の「渡海」も「水行」（20日及び10日）も「陸行」（1月）もあるものと記してきた。他方、『三國志』の記述からは司馬懿軍の陸上移動について洛陽から遼東までの4000里の道のりに100日を要するものとされ（魏書明帝紀）、1日あたりの移動は40里と計算される。もちろんこれは大軍の移動の話なので、単なる使者ならそこまで時間を要しないと想像できる。倭国から帯方郡への使者は「倭載斯烏越等」として2名以上いることが記されているものの実際の部隊が何人規模であったかはいざ知れず、それでも12000里以上（4000里の3倍）の陸海を行くのに数ヶ月は要するものと読み手は考えるであろう。この倭人伝の記載上の距離12000里が実際の地図で12000里（500キロメートル以上）でないことは現代の地図を見られる私たちならわかっているが、実際の距離を行く日数としても、例えば九州北部から帯方郡（現在の北朝鮮サリウォン。韓国ソウル説もある）まで当時の航海術で何日かかったであろうか。有名な野生号の実験を踏まえても片道で1ヶ月以上はかかるし、往復ならその倍である。しかも使者たちの派遣元が九州だったとは限定できず、畿内だったかもしれないし、そうなると行ったり来たりで数ヶ月は要するのである。

いったいこの使者たちは自国と敵国との「相攻撃状」を伝えるためにわざわざ遠くから手ぶらでやって来て、何をしてもらおうと思ったのか。伝えるだけ伝えたとしても、そこからまた倭国に戻って見たら件の「相攻撃状」は終わっているとは考えなかったか。魏（帯方郡）もそれに対して援軍ではなく現地旗（黄幢）を授けただけと書かれている。「檄」だの「告諭」だの役に立たないものをつけて。それも卑彌呼あてではなく難升米に。これはあまりにおかしな筋書きなのである。

つまり卑彌呼は救援や勇気づけを求めるために正始八年の使者を派遣したとは考え

られないのである。だとすると、やはり卑彌呼と狗奴國とが「長年」「争った」というのがそもそも勝手な空想であり誤った解釈だったと言わざるを得ない。まして、『三國志』の読み手は帯方郡から倭の女王國まで 12000 里で解釈しているのだから、往復で 1 年ほどもかかりそうな遠くの異民族が援軍を頼みにきたとは思えない。このような、あったかどうかもある「争い」について、本書ではその「結末が書かれていない」(p.129) と言うのだが、それはそうである。争いそのものがないか、たとえあったとしても魏にとってはノータッチで問題とされていないのである。

おそらく、本書にも見られる「最大のライバル・狗奴国」などという対決構図の先入観が、こうした誤った解釈に陥らせる元凶ではないかと思われる。本当に「ライバル」なのか。仮にライバルだとしても、「最大」とは何なのか。最大ではないライバルもいたのか。倭人伝をどんなにひっくり返してもその答えは出てこないであろう。

卑彌呼の死亡の原因についても、「いかようにも解釈できる書き方から、卑彌呼は狗奴国との争いの最中に亡くなった、あるいは狗奴国との争いの責任を負わされて処刑された、など様々な説が存在している」(p.129) としながら、やはり対決構図から脱していない。卑彌呼については倭人伝に「年已長大」と記されており、王といえども老いては死にゆくもので、自然死こそがまず思いつかねばならないのだが、それ以上に幻想が強いのである。おばあちゃんが死んだだけの話をどうしてもドラマチックな意味のあるものにしたい気持ちもわかるが、それは別の所でやってくれたらよい。

こうした幻想がある限り、どんなに考古学や科学の手で古代の復元が進んでも、この国の成り立ちのストーリーはいつまでも邪馬台国と結びつくことはなく、研究成果と文献解釈との溝は深まるばかりであろう。これだけの内容を網羅している本書でさえ、文献解釈については数十年も遅れている。これは NHK スペシャル取材班がどうというよりも、ちまたの邪馬台国関連の文献解釈論があまりにも時代遅れのままでいることの現れであると思われ、なかなか情けない。

本書の言う「グローバルヒストリー」の中核をなしているのは、ユーラシア大陸を駆け巡った遊牧騎馬民族の存在である。騎馬民族の勢力拡大（おそらくその背景に鉄器生産技術の向上）により西も東もその影響を受け、血を流しながらも文化や技術を吸収してきた歴史のことを指している。日本列島も例外ではない。そうした世界的な動乱の中で、同時に動乱期を迎えていた卑彌呼たちの倭國がどのように立ち回って未来を切り開いてきたのかを示そうとはしている。ただ、日本への馬とその文化・技術との本格的到来は 4 世紀末から 5 世紀にかけてであることを考古学的に示すにとどめているため、3 世紀の卑彌呼の時代から謎の 4 世紀の大部分までの時代が、グローバルヒストリーと繋がってこないのである。国内での前方後円墳や前方後方墳の広がりのお話も、馬具の出土のお話も、朝鮮半島の前方後円墳のお話も、これではほとんど意味をなさない。

さらに、本書では 3 世紀には卑彌呼の勢力と狗奴國の勢力とが「最大のライバル」関

係にあって争っていたことになってしまっているものだから、視点が朝鮮半島にも東アジアにも向かない。本来はこの時代あるいはそれよりも前の弥生時代前期・中期からの日本列島、朝鮮半島、中国大陸を舞台としたグローバルヒストリーの観点によって、卑彌呼の時代にもすでに朝鮮半島で倭人がどれほど当たり前活動していたかを示し、のちに「倭の五王」たちが半島での軍事権を要求し与えられた事実に結びつけることができれば明快だったのだが、そこを文献学の遅れが足を引っ張っている。文献学における遅れを取り戻すには大きな意識改革、視点の「渡海」が必要である。（了）